

一四——一六世紀のメッカのウラマー

——ファアフド家の事例から

太田 啓子

一 前近代のメッカと「旅」

リフラ¹⁾とは「旅」「旅程」「旅行記」などを表すアラビア語である。しかしながら前近代のイスラーム地域において、リフラは狭義にはメッカ、メディナといった聖地への巡礼の旅、またその巡礼の様子を記した巡礼記を指してきた。¹⁾イスラームは、聖地メッカへの巡礼を信徒の宗教的義務のひとつとしたことから、交通手段が限られ、移動が容易ではなかった前近代においても、西はスペイン（アンダルス）、北アフリカ（マグリブ）、南はサハラ砂漠南縁部、そしてエジプト、シリア、アラビア半島などメッカ周辺の地域、ひいては東の中央アジア、南アジア、東南アジアにまでまたがる広域間での人・モノ・情報の移動が必然的に引き起こされる結果となった。

しかしながらメッカ巡礼はウラマー（イスラーム学者）にとつてはほとんどの場合、学問的知識の探求の旅であった。メッカ巡礼への出立を契機に旅を始めたウラマーは、イスラーム諸学の知識を求めて都市を移動し、見聞を広めるとともに、各地のマドラサ（学院）において師について学問を修め、イジャーザ²⁾（修了証書）を授与された。そして故郷

に戻ったのちには、自らが知己を得た学者、修得した学問的知識の内容、修得過程、師の伝記などについての情報を巡礼記中に記録するのが常であった。

他方、旅の目的地であるメッカに在住していたウラマーはどういった人々であったのか、どのようにして自らの知を形成し、それをアウトプットしていたのかについてはこれまでほとんど研究が行なわれてこなかった。その理由としては、遠方からメッカを訪れた人々は巡礼記を著したが、近隣の地域からメッカを訪れた人、もしくはメッカ在住者は巡礼記を著さなかったため、史料としての巡礼記が欠如していたこと、また、そもそもこれまでの研究においては、メッカを巡礼の目的地として捉え、その宗教的な性格に着目し、「イスラーム世界の中心」としてシンボリックに捉える見方が主流であり、メッカの政治・経済・文化的状況についての研究はあまり進んでいないことが挙げられる。⁽²⁾

こういった研究状況を踏まえ、本稿においては一四—一六世紀に活躍したメッカのウラマーの家系であるファフド家 Banū Fahd に焦点を当て、その構成員およびそれぞれの活動内容についての分析を行ない、前近代のメッカのウラマーが、どのような活動を行ない、その存在と活動にはどのような意義があったかについて考察する。史料としてはファフド家のウラマーを含むメッカのウラマーの著作、そして彼らと交流のあったメッカ外部のウラマーの著作などを用いる。ファフド家のウラマーの著作としては Najm al-Dīn ‘Umar ibn Fahd (812/1409–885/1480) による年代記 *Ithāf al-warā bi-akhbār Umm al-Qurā’ ‘Izz al-Dīn ‘Abd al-‘Azīz ibn Fahd* (850/1447–921/1515) による年代記 *Bulūgh al-qirā’ fī dhayr Ithāf al-warā bi-akhbār Umm al-Qurā* を用いる。また、同じメッカのウラマーであるフアーヌイー Taqī al-Dīn Muḥammad al-Fāstī (775/1373–832/1429) による人名事典 *al-‘Iqd al-thamīn fī ta’rīkh al-Balad al-Amin* も用いる。⁽³⁾ メッカ外部のウラマーについてはムムルーク朝期エジプトのウラマーであるサハーウィー Shams al-Dīn Abū al-Khayr Muḥammad al-Sakhāwī (830/1427–902/1497) による伝記集 *al-Daw’ al-Jamī’ fī a’yān al-qarn al-fāsi’* およびイブン・ハジマル Shihāb al-Dīn Abū al-Fadl Ahmad Ibn Hajar al-‘Asqalāmī (773/1372–852/1449) による伝記集 *al-Durar al-kāmina fī a’yān al-mī’at al-thāmina* を用いる。⁽⁴⁾

二一 ファアブド家のウラマー

ファアブド家が活躍した一四—一六世紀当時、メッカはマムルーク朝の支配領域であったが、第四代正統カリフ・アリーの子ハサンの家系のシャリーフ *sharif* (預言者ムハンマドの血統保持者) が、アミール・マツカ *amir Makkā* (メッカの統治者) として実質的な地域支配を担っていた。立地条件、気象条件的に農業収入に依拠することは困難であったことから、彼らは巡礼や商業、そして外部からのワクフ収入や義援金などを主要な財源としていた。ファアブド家はメッカのウラマーの家系であり、ムハンマド・イブン・ハナフィーヤ *Muhammad b. al-Hanafiya*⁽⁷⁾ を通してカリフ・アリーの血統を引いていると主張してきた。一族はいずれもイスラームの伝統的学問に通じ、ハディース学およびシャーフィーイー派法学の教育を受けた。中でも次の四世代にわたるウラマーは活発な学問的活動を行い、いずれもメッカ史および人名事典を著した。⁽⁸⁾

(一) タキー・アッディーン・ムハンマド *Taqī al-Dīn Muhammad ibn Fahd* (787/1385-871/1466)⁽⁹⁾

ファアブド家はメッカのウラマーの家系であったが、タキー・アッディーン・ムハンマドは上エジプトのアスフーン *Asfūn al-Jabalayn* で一三八五年に生まれた。これは彼の祖父であるカーディー *Muhammad b. Muhammad b. 'Abd Allāh* (ca. 735/1334 (5) - 770/1369) の妻 *Khatīja*⁽¹⁰⁾ がアスフーン出身の家系の一員であったことが背景として挙げられる。

彼は八歳の時に父 *Najm al-Dīn Muhammad* (ca. 760/1358 (9) - 811/1408)⁽¹¹⁾ とともに紅海沿岸の港町クセイル *al-Qusayr* 経由でメッカへ帰還した。その後メッカにて、メッカのウラマーおよびメッカを訪れたウラマーからイスラーム諸学を修めるとともに、メディナ、イエメンに修学の旅に出た。特にイエメンは二回訪問したと伝えられている。その後、メッカにて

同地を訪れていたイブン・ハジャール、マクリーズイー Taqī al-Dīn Abū al-'Abbās Ahmad al-Maqrīzī (766/1364-845/1442)⁽¹²⁾らと出会い、彼らから教えを受けた。特にイブン・ハジャールからはシャーフィイー派法学でイジャヤザを授与され、その後も書簡の交換などを通じて終生交流を行った。イブン・ハジャールは自身の著書におけるメッカ・イエメンの著名人の死亡録執筆の際、タキー・アッディーン・ムハンマドから多くの情報を得たと言われている⁽¹³⁾。その後、外部からメッカを訪れて彼の下で学問を修めるウラマーも現れ、その中には前述のサハーウィーもいた。

彼はその生涯において預言者ムハンマドの伝記・逸話集、クライシユ族に関する著作、そしてメッカ内外の歴史、メッカのウラマーの歴史などについて三〇点以上の著作を著した。その中でもザハビー Shams al-Dīn Muḥammad al-Dhahabī (673/1274-748/1348) の伝記集 *Tadhkirat al-huffāz* の続編である *Lahz al-ahfāz bi-dhayl tabaqāt al-huffāz* は資料的価値が高い⁽¹⁴⁾。彼は写本の収集家としても知られており、その蔵書をワクフとして設定し、他のウラマーが自由に利用できるようにしたと伝えられている。彼の死後、この蔵書の管理は彼の子孫へと委ねられた。

(二) ナジyum・アッディーン・ウマル Najm al-Dīn 'Umar ibn Fahd (812/1409-885/1480)⁽¹⁵⁾

父がメッカ生まれではなかったのに対し、ナジyum・アッディーン・ウマルはメッカで生まれ、メッカで育った。父やその他のウラマーからイスラーム諸学を修めたのちにダマスクス、バアルベク、アレツポなどのシリア諸都市、そしてカイロに留学、マクリーズイー、イブン・ハジャールらから教えを受けた。その後エルサレム、ヘブロンにも留学した。彼のウラマーとしての知名度が上がるにつれ、今度は学問を修めるために彼の門戸を叩くウラマーが現れたが、その中にはサハーウィーと知己があつたサムフリーデー *Nūr al-Dīn Abū al-Ḥasan 'Aḥḥ b. 'Aḥf al-Dīn 'Abd Allāh al-Samhūdī* (844/1440-891/1506)⁽¹⁶⁾ がいた。

彼は歴史書、伝記集など多くの著作を著したが、その代表作としてメッカ年代記である *Iḥāf al-warā bi-akḥbār Umm al-*

Quraが挙げられる。これはヒジュラ暦元年からナジュム・アッディーン・ウマルの死去までの期間を扱ったものであり、メッカのみならず、メッカ周辺の地域についての詳細な情報も含んでいる。また、ファースイーの人名辞典 al-'Iqd al-thamīn *fi ta'rikh al-Balad al-Amin* の続編である al-Durr al-kamīn *bi-dhayl al-'Iqd al-thamīn fi ta'rikh al-Balad al-Amin* は一七〇〇人以上の人物の伝記を収録しており、そのうち三〇〇人近くが女性である。彼の著作は、マクリーズイーの著書からの引用、ファースイーの著書からの引用が多く見られ、彼が広く内外を問わず多くの情報源から情報を得ていたことが分かる。

(二) イZZ・アッディーン・アブドゥル・アズィーズ 'Izz al-Dīn 'Abd al-'Azīz ibn Fahd (850/1447-921/1515)
彼もまたメッカで生まれ、メッカで育った。彼が生まれた時、父ナジュム・アッディーン・ウマルはカイロに行っていて不在であったが、その後、彼も祖父、父と同じくメッカ内外で学問を修めることとなった。彼はシャーフイー派法学を修めたのちメデイナに留学、その後、カイロ、シリア、エルサレム、ガザ、ナーブルス、ダマスクス、サーリヒーヤ、バアルベク、ハマー、アレツポなどに留学し、その後メッカに帰還した。四年後にはエジプトに赴き、帰国後再びダマスクス、カイロを訪れ帰国、その後またカイロに赴き、今度はメッカ巡礼隊と共に帰還した。このように彼は精力的にメッカの外で学問を修めたが、その後はメッカで学問を教授する日々を送ったと言われている。

特筆すべき業績は父の著したメッカ史の続編である *Bulugh* であり、彼が死去する年までのメッカの社会・経済状況についての詳細な情報を含んでいる。また、一四六七年に当時メッカのアミールであったシャリーフバラカート Barakat b. Muhammad (d. 931/1525) の求めに応じて執筆を開始した年代記 *Ghayat al-narām bi-akhbār salṭanat al-balad al-jarām* は、シャリーフの血統と彼らの統治を扱った内容である。彼もまたその父祖と同じく数々のウラマーと知的交流を行い、サハーウィー、サムフリーデーとも知己を得ていた。

(四) ムヒッブ・アッディーン・ジャール・アッラーフ・ムハンマド Muhibb al-Dīn Jār Allāh Muhammad ibn Fahd (891/1486-954/1547)⁽⁸⁾

彼もまたメッカ生まれ、メッカ育ちのウラマーであった。四歳の時にはメディナのサハールウイーの元に赴き、一五〇三・四年には父とともに再びメディナを訪問、ムジャーウィル mujāwir (聖地寄留者)として滞在し、勉学に励んだ。その後メッカへ帰還するも、のちにシリアのダマスクス、アレppoに留学した。ダマスクスにおいては歴史家イブン・トゥールーン Ibn Tulūn (d. 953/1546) の知己を得、書簡の交換を通じて終生交流を行なった。また一五一六・七年にマムルーク朝スルタンニカーンスーフ・アルガウリー Qānsawh al-Ghawrī (r. 906/1501-922/1516) がオスマン朝軍との和平交渉のためにアレppoを訪れた際に同地に居合わせ、その後カーンスーフ・アルガウリーについての著作を著したと伝えられている。その後エルサレム、イエメンなどにも留学した。

彼自身の著作は多くはないが、父イッズ・アッディーン・アブドゥル・アズィーズのメッカ史の続編である *Kitāb hayl al-munā bi-dhayl Bulugh al-qirā* は一五一七―一三九九年の期間を扱う。⁽⁹⁾

三 フアフド家の活動

ファフド家の構成員については、前述の四人以外も活発な学問的活動を行っていた。また、それに加えて彼らは、メッカ内外の家系と婚姻関係を通じて結びついたり、国際商業にも積極的に参与するなど、その活動は多岐に渡った。以下、婚姻関係、学問的活動、商業活動の三点から彼らの活動の広がり进行分析する。

(二) 婚姻関係

ファアド家の構成員は、メッカ外部の地域からメッカに移住してきたウラマーや商人の家系と婚姻を通じて密接な関係を結んでいた。これは人・モノ・情報の結節点であるメッカならではの特徴であるとも言える。メッカにはムジャーウイルが多く滞在していたことも、この傾向に一層拍車をかけた。

前述のタキー・アッディーン・ムハンマドの祖父は、⁽²⁰⁾Abd al-Rahman b. Yusuf の娘である Khadija と結婚したが、⁽²¹⁾Abd al-Rahman b. Yusuf は元々、上エジプトのアスフーンからメッカに移住してきたシャーフイー派のウラマーであった。Khadija は父からアスフーンにあるワクフ（寄進財）を相続しており、タキー・アッディーン・ムハンマドがアスフーンで生まれたのには、当時、彼の父が、母から相続したそのワクフからの収入を受け取るためにアスフーンを訪れていたという背景があった。彼の父はその後、母方の親戚であるアスフーンの女性 Fatima bt. Ahmad と結婚し、⁽²²⁾タキー・アッディーン・ムハンマドを含む何人かの子供に恵まれたため、ファアド家と上エジプトとの結びつきはさらに強化された。このように、婚姻関係は地域を超えた財産のネットワークをも形成していた。

また、タキー・アッディーン・ムハンマドの従兄弟である Yahya は、ウラマーであると共にインド洋貿易に従事していた商人でもあり、エジプト、シリア、イエメンのみならず、アナトリア、インドにも赴いた。彼はメッカの商人である al-Duqūqī⁽²³⁾ の娘と結婚した。⁽²⁴⁾

また、タキー・アッディーン・ムハンマドの弟である Afiya (804/1402-874/1469) は Fatima という女性と結婚したが、彼女の父はインド系であったと伝えられている。⁽²⁵⁾ 他にも、前述のナジュム・アッディーン・ウマルは Aisha という女性と結婚したが、彼女はイスファハーン出身の商人である al-Aḥfīf Abd Allah b. Muhammad b. Aḥr al-Ajami の娘であった。⁽²⁶⁾ また、ナジュム・アッディーン・ウマルの兄である Abu Bakr Ahmad はウラマーであったが、⁽²⁷⁾彼はタブリーズに出自を持つメッカの富裕な商人である Abu Bakr al-Tabrizi⁽²⁸⁾ の娘と結婚した。

このように、ファフド家の構成員はエジプト、インド、イランなど、メッカ周辺にとどまらない広い地域の商人やウラマーの家系と婚姻関係を結ぶことにより、そのネットワークを広げていた。こうしたネットワークの存在は、彼らがメッカの外で学問的活動および商業活動を行う際、彼らに有形無形の足がかりを与えていたと考えられる。

(二) 学問的活動

前述の四人のファフド家のウラマーが、メッカを訪問するウラマーと積極的な交流を行ない、師弟関係を築いていたこと、また、進んで学問的知識探求の旅を行い、学問を通じた人的ネットワークを築いていたことは二章で言及したが、彼ら以外の多くのファフド家の構成員もまた、イスラームの伝統的諸学問を修め、ウラマーとして活動を行ない、カーデーイなどの職を得ていた。タキー・アッデイン・ムハンマドの曾祖父である Jamāl al-Dīn Muhammad b. 'Abd Allāh はメッカのカーデーイ職にあつた。⁽²⁶⁾ また、祖父 Muhammad b. Muhammad b. 'Abd Allāh もメッカのカーデーイであつたと伝えられており、また、その妻 Khadija の父親 'Abd al-Rahmān b. Yusuf もシャーフイーイー派のウラマーであつた。

また、前述の Abu Bakr Ahmad は写本の書写で活躍したウラマーであつたが、広く旅を行い、インドを二回訪問したと伝えられている。⁽²⁷⁾ 彼はタブリーズ出身の商人の娘と結婚し、その子息 'Abd al-Rahmān (841/1437-873/1469) はインドのカリカットで生まれた。⁽²⁸⁾

また、ナジyum・アッデイン・ウマルの息子 Yahyā (848/1444-885/1481) も著名なウラマーであり、メデイナ、ターイフ、カイロ、イエメンに留学し、イスラーム初期の出来事をまとめた *al-Dalā'il li'l ma'rifa't al-awwāl* を著した。彼は祖父の蔵書の補修・修復なども行なっていた。⁽²⁹⁾

(三) 商業活動

ファアド家の構成員は、その多くが国際商業にたずさわっていた。彼らは商用でイエメンなどアラビア半島各地、エジプト、シリアなどメッカ周辺の地域を訪れるのみならず、インド、東アフリカなどメッカ遠方の地域をもしばしば訪れた。

タキー・アッディーン・ムハンマドの曾祖父である Jamal al-Dīn Muhammad b. 'Abd Allāh はメッカのカーディーであったが、兄弟の Hasan (d. 740/1339 (40) 以降)⁽³³⁾ とともに商業活動も行なっていた。

また、タキー・アッディーン・ムハンマドの従兄弟の Yahya は、ウラマーであるとともによりインド洋貿易に従事していた商人であり、その子息である 'Abd al-Qādir もまた、イエメン、東アフリカなどをしばしば訪問する、インド洋交易に従事する商人であった。彼はアフリカ東海岸のサワーキン Sawākin で死去したと伝えられている。⁽³⁴⁾

また、ナジュム・アッディーン・ウマルについては、その兄弟 Abū Bakr Ahmad はタブリーズ出身の商人と婚姻関係をもち、妻の父親はイスファハーン出身の商人 al-'Aḥfī 'Abd Allāh b. Muhammad b. 'Alī al-'Ajāmī であつた。⁽³⁵⁾

彼らは自ら積極的に商業に携わるのみならず、商人の名家と進んで婚姻関係を結ぶことによつてみずからの商業ネットワークを拡大しようとした。こうして強化された彼らの経済的基盤は彼らが学問的活動を行う上でも役に立つたと考えられる。

以上、ファアド家の構成員は、メッカを訪れたウラマーや商人らと婚姻関係、学問的活動、商業活動のそれぞれの分野において密接な交流を行なうのみならず、自らも修学、商業などの目的でメッカの外部へと活動範囲を拡張、メッカの世界と深く結びついていた。すなわち、メッカの求心性に依拠しながら、同時に、みずからも移動しつつ、ネットワークを広げていった。ファアド家のウラマーの著作物は、メッカで起きた歴史的事件、メッカの地方有力者・名家の動向、メッカで起きた自然災害などの土着の情報を詳細に記述している一方で、マムルーク朝、ラスール朝、イル・ハーン国などの周辺王朝の動向についても詳しく言及している。彼らの著作物に現れる土着性 locality と国際性 internationality とい

う二面的な性格の背景には、ファアド家の多岐にわたる国際的な活動があったと考えられる。

四 まとめと課題

一四―一六世紀のメッカのウラマーについて、ファアド家を事例として取り上げ、その存在と活動の意義を考察した。メッカはイスラームの聖地としての求心性を持つ一方で、都市としてはその経済を外部からの食料・資金の供給や来訪者（巡礼者、商人）に依存していたことから、必然的に外部との結びつきが強化された。メッカのウラマーについても、彼らはメッカ外部の情報を得るため、進んでその活動範囲を広げていった。他方、メッカ外部のウラマーはメッカのシャリーフの情報やメッカの地誌など、メッカ土着の情報を求めてメッカのウラマーと進んで学問的交流を持った。両者の相互交流によって深められた学識や情報は、双方のウラマーの著作物の内容に反映され、それがイスラーム世界共有の知的財産として継承されていくという現象が起きた。また、学問においてはメッカのウラマーの関心はエジプト、シリア、イエメンなどのマシユリクにあった一方で、商業においては東アフリカ、イラン、インドなど、インド洋世界にまで展開していた。ファアド家はいわば、メッカの持つ求心性と拡散性を、「婚姻」「学問」「商業」という分野において体現する存在であったと言える。

今後の課題としては、こうした彼らの活動の特徴が、ファアド家以外のメッカのウラマーにも当てはまるかどうかを検証することが挙げられる。メッカにはファアド家以外にもタバリー家、ヌワイリー家などのウラマーの名家が存在した。また、もう一つの聖地メディナにおける事例との比較も重要である。メディナは第三代カリフ・ウスマーンまでは政治的中心として機能していたが、第四代カリフ・アリーがクーファに遷都した後はメッカ巡礼の途上に巡礼者が立ち寄る聖都、そして学問の場としての性格を深めた。預言者のモスクはイスラーム諸学の研究・教育の場となり、ワクフを運営資

金とする講義が設置された。³⁶⁾

もう一つの課題は、メッカのウラマーがメッカ外部のウラマーに求めた「知」の内容、そしてメッカ外部のウラマーがメッカのウラマーに求めた「知」の内容についてである。彼らは師について学び、イジャーズを取得するという、当時のイスラーム知識人の伝統的な手法に則って、主にハディース学、法学、歴史学を相互に修得した。こうして彼らの間で伝達、継承された「知」にはどのような傾向があったのか、また、東アフリカ、イラン、インドなど、マシユリク以外のウラマーがどのような影響を彼らに及ぼしていたのかについても今後、社会的・経済的文脈の中で検討していく必要がある。

主要史料

- al-Fāsī, Taqī al-Dīn Muḥammad. *al-'Iqd al-thamīn fī ta'rīkh al-Balad al-Amin*. 8 vols., al-Qāhira, 1959-1967.
Ibn Fahd. 'Izz al-Dīn 'Abd al-'Azīz. *Bulugh al-qirā' fī dhayl ṭhāf al-warā bi-akhbār Umm al-Qurā*. 4 vols., al-Qāhira, 2005.
Ibn Fahd. Najm al-Dīn 'Umar b. Muḥammad. *Ṭhāf al-warā bi-akhbār Umm al-Qurā*. 5 vols., Makka, 1983.
Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, Shihāb al-Dīn Abū al-Faḍl Ahmad b. Nūr al-Dīn 'Alī b. Muḥammad. *al-Durar al-kāmina fī a'yān al-mi'at al-thāmīna*, 4 vols., Beirut, n.d.
al-Sakhāwī, Shams al-Dīn Muḥammad ibn 'Abd al-Rahmān. *al-Daw' al-lāmi' fī ahl al-qarn al-fāsi*, 12 vols., al-Qāhira, 1934-1936.

註

- (一) 『Rihla』 Ef. 行った聖地への巡礼記はヒジャーブ巡礼記 *al-riḥlat al-ḥijāziya*、メッカ巡礼記 *al-riḥlat al-Makkīya* と呼ばれ、イスラーム史、そして文学史上、貴重な史料群

を形成してきた。この点については家島彦一「マグリブ人によるメッカ巡礼記 *al-Rihlat* の史料性格をめぐって」(『アジア・アフリカ言語文化研究』25: 194-216, 1983年)に詳しい。

(2) メッカの政治的・経済的状况にについては Richard T. Mortel, *al-Ahwāl al-siyāsīya wa al-iqtisādīya bi-Makka fī ‘asr al-Mamlūkī*, Riyadh: Jamī‘at al-Malik Sa‘ūd, 1985; John Lash MeLOY, *Imperial Power and Maritime Trade: Mecca and Cairo in the Later Middle Ages*, Chicago: Middle East Documentation Center, 2010 を参照。また、メッカのシャーリーフ政権については Keiko OTA, “The Meccan Sharīfate and its diplomatic relations in the Bahri Mamluk period,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 17/1: 1-20。メッカの聖モスタのイブームについては Kaori OTSUYA, “Maliki imams of the Sacred Mosque and pilgrims from Takrūr,” *Chroniques du manuscrit au Yémen* 25: 53-72 がある。

(3) メッカの歴史家、法学者。幼少期に数年間メディナに滞在し、その後ダマスカスでザハビー al-Dhahabī の子息であるアブー・フライラ Abu Hurayra、イブン・ハルドゥーン Ibn Khaldūn と共に学問を修めた。一三九四・五年にはエジプトへ、一四〇二・三年にはイエメンへ留学した。一四〇五年、メッカのマリーク派カーデーイーに任命され、一四二五年まで二度の短期間の中断を経て在職した。彼の著した人名事典 *al-‘iqd* は二五〇〇名を超えるメッカ史における著名人の伝記から成る。その多くがファースイーと同時代人であり、一四二六年にこの本の執筆が終えられるまでのメッカの社会・政治史についての重要史料である。また、メッカの地誌であり、歴史書でもある *Shifā’ al-*

gharam bi-akhbār al-Balad al-Haram も彼の著作として名高い (“al-Fastī,” E¹)。

(4) マムルーク朝期エジプトのハディース学者、歴史家。両親を早くに亡くしたものの、カーリミー商人を親戚に持つ裕福な家系であったため、経済的には不自由することなく学問的研鑽を積んだ。カイロにて諸学問を修めたのち、アレクサンドリア、ヒジャーズ、イエメン、パレスティナ、シリアに留学した。マドラサの教授、カーデーイー、説教師、ムフティーなどを歴任した。 (“Ibn Ḥaǧǧar al-‘Askalanī,” E²)。

(5) マムルーク朝期エジプトの歴史家、伝記作家。ハディース学の権威でシャーフィーイー派法学者、歴史家であったイブン・ハジャールの下で学問を修めた。イブン・ハジャールの死後、メッカ巡礼を行ない、その後メディナに参詣、この地で没した。伝記集 *al-Daw’* には一五世紀の二万人以上の伝記が収録されている (“al-Sakhawī,” E³)。

(6) 当時のメッカの人口については不明だが、一一世紀半ばにメッカを訪れたナースィール・ホスロー Nāsīr Khusrāw はメッカの成人男性人口を二千人、旅行者およびメッカ寄留者を五百人と述べている。また、二〇世紀初頭には人口約六万人(一九二三年)、巡礼者十二万人(一九〇七年)との記録があることから、その人口は巡礼期には急増するという特殊性があったと考えられる (“Makka,” E⁴)。

(7) アリーとハウラ Khawla の息子。預言者ムハンマドの

- 血筋を直接引いてはいなかったが、七世紀にクーファで成
立したシリア派の一派であるカイサーン派でイマームと考
えられた。 (“Muhammad b. al-Hanafya,” “Kaysaniyya,” *EF*)。
- (8) ファフド家のウラマーについては次の文献を参照。
Nāsir b. Sa’d al-Rashīd, “Banū Fahd: Mu’arrikhū Makka al-
Mukarrama wa al-tarīf bi-makhūṭ al-Najm b. Fahd *Ithāf* al-
warā bi-akhbār Umm al-Qurā,” *Studies in the History of Arabia*,
1 (2) : 69–90, Riyadh, 1979; “Ibn Fahd,” *EF*; “Ibn Fahd,” *EF*。
- (9) Najm al-Dīn ‘Umar ibn Fahd, *Ithāf*, 4: 475; al-Sakhāwī, *al-
Daw’*, 9: 281–283; Nāsir b. Sa’d al-Rashīd, “Banū Fahd,” 69–
71。
- (10) al-Fasī, *al-‘Iqd*, 8: 209。
- (11) *Ithāf*, 3: 467; *al-‘Iqd*, 2: 333; *al-Daw’*, 9: 231。
- (12) エジプトの歴史家。法学やハディース学を学んだの
ち、メッカに留学。その後カイロで市場監督官、説教師、
マドラサの教授などを務めた。歴史書や地誌など、その生
涯で二〇〇点以上の著作を著した (“al-Makrizī,” *EF*)。
- (13) *al-Daw’*, 6: 129。
- (14) ダマスクス生まれのアラブの歴史家、ハディース学
者、伝記作家。 *Tabaqat al-huffāz* は彼の名著 *Tarīkh al-Islām*
からの伝記部分の抜粋であり、タキー・アッティーン・ム
ハンマド以外にも、アッスヌーティー al-Suyūṭī (849/1445–
911/1505) がその続編を *Dhayr tabaqat al-huffāz li al-Dhahabī*
のタイトルで著した (“al-Dhahabī,” *EF*; “al-Suyūṭī,” *EF*)。
- (15) ‘Abd al-‘Azīz ibn Fahd, *Bulūgh*, 1: 83–86; *al-Daw’*, 6:
126–131; Nāsir b. Sa’d al-Rashīd, “Banū Fahd,” 71–74。
- (16) エジプトの歴史家、法学者、神学者。上エジプトのサ
ムフドでカーデーイーの息子として生まれた。カイロで多
くの碩学の元で学問を修め、一四五六年にメッカ巡礼、そ
の後メティナに居住した。多くの著作を著したが、その中
で *Wafā’ al-wafā’ bi-akhbār Dār al-Mustafā* が最も有名であ
る (“al-Samhūdī,” *EF*)。
- (17) *al-Daw’*, 4: 224–226; Nāsir b. Sa’d al-Rashīd, “Banū
Fahd,” 74–76。
- (18) *al-Daw’*, 3: 52; Nāsir b. Sa’d al-Rashīd, “Banū Fahd,”
76–78。
- (19) 彼はその他、ジッダ、タイイフといったメッカ近郊の
地についての短い論文など、多くの著作を著した。
- (20) *Ithāf*, 3: 244; *al-‘Iqd*, 5: 415–418; Ibn Hajar, *Durar*, 2: 350。
- (21) *Ithāf*, 4: 75; *al-Daw’*, 12: 88。
- (22) *al-Daw’*, 5: 240。
- (23) *al-Daw’*, 10: 233。彼は滞在先のインドで死去した。
- (24) *al-Daw’*, 5: 148。
- (25) *al-Daw’*, 2: 167。
- (26) *al-Daw’*, 5: 59。
- (27) *Bulūgh*, 1: 387–388; *al-Daw’*, 11: 92。
- (28) *al-Daw’*, 11: 93。
- (29) *al-‘Iqd*, 2: 79–81; *Ithāf*, 3: 207。彼はメッカの名家タバ

リー家のカーディーである Najm al-Dīn Abū Ḥamid al-Tabarī (d. 730/1330)、『そしづきの皇子 Shihab al-Dīn Abū al-Faḍl (d. 760/1359)』のカーディー代理を務めた。

(30) *al-Dawʿ*, 11: 92. 彼は一四三六・七年にカリカット Kalikāt 一四四三・四年にクンバーヤート Kumbāyat を訪問したと伝えられている。

(31) *al-Dawʿ*, 4: 70.

(32) *Bulūgh*, 1: 104–105; *al-Dawʿ*, 10: 238–240.

(33) *al-ʿIqd*, 4: 82.

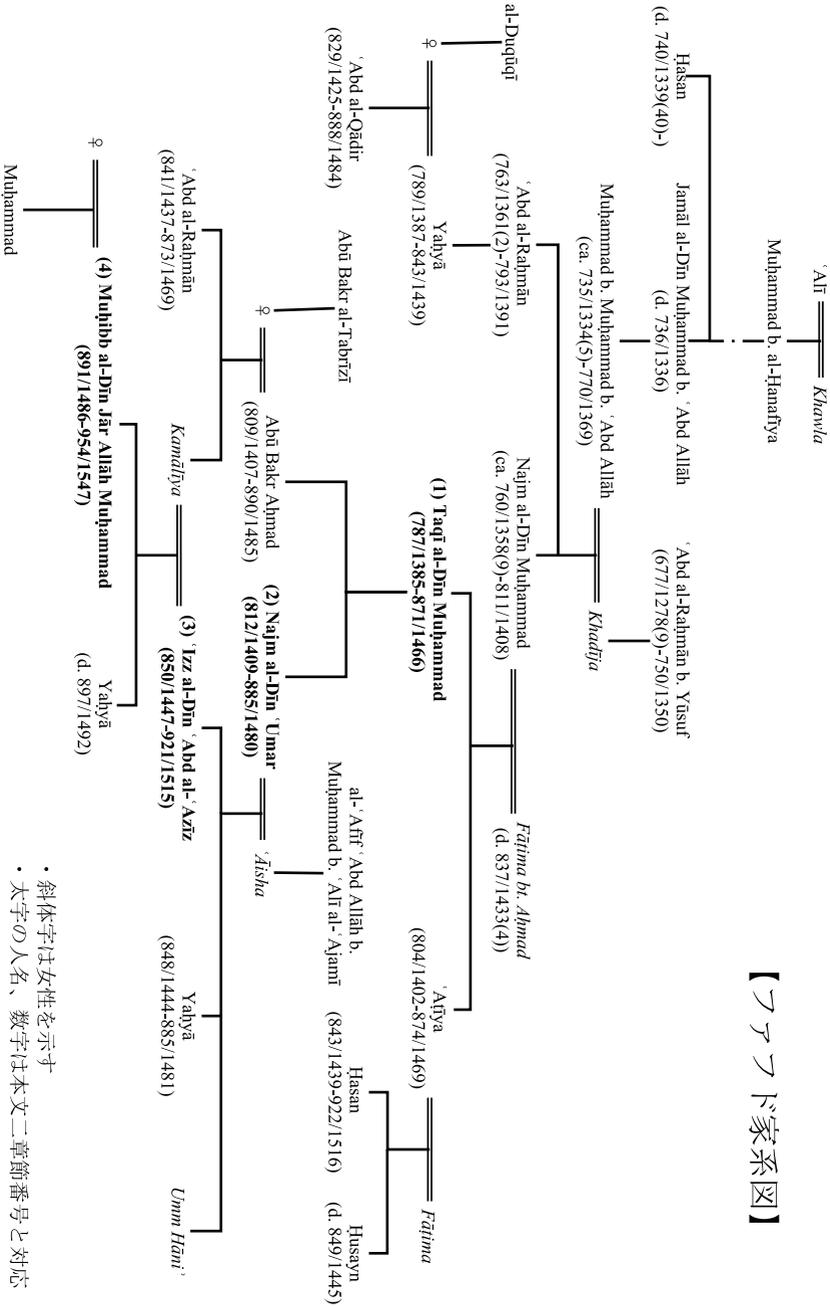
(34) *al-Dawʿ*, 4: 299.

(35) *al-Dawʿ*, 5: 59.

(36) マムルーク朝とメデイナの関係性については長谷部史彦「マムルーク朝期メデイナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」(今谷明編『王権と都市』思文閣出版、二〇〇八年)参照。

(公益財団法人東洋文庫若手研究員)

【フアフト家系図】



- 斜体字は女性を示す
- 太字の人名、数字は本文二章節番号と対応